

2019 Vol.14

GLOCAL



Forum

- 言語接触と言語変化:
現代の英語に残る他言語の面影 _____ 柳 朋宏
- 名古屋圏の都市を読み解く _____ 林 上

From abroad

- Spiritual Intelligence for Organizational Sustainability and Success
in the Age of 5th Social Revolution _____ Mohd Anuar Arshad

Notes

- 成人の科学教育の場としての博物館に関する研究:
ハンズオン展示を中心に _____ 川井りさ子
- 内モンゴルフルンボイルにおける草原観光の季節的変動に関する研究:
新バルグ右旗のゲルキャンプ運営を中心に _____ セレンメン

Symposium

- シンポジウム「関中平原開発史考:
考古学と歴史学からみる『人と水資源』」を開催

News & Record

- 部門間協定先機関:内モンゴル大学蒙古学学院蒙古歴史学系の紹介
- 2018 年度秋学期FD 講演会「思想を語るメディア:
江戸思想史再構成のこころみ」を開催
- 第9回「院生の力」研究報告会を開催
- 第10回 教員研究報告会を開催

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート『GLOCAL』Vol.14 をお届け致します。

1991年に国際関係学部の上に創設された国際関係学研究科をルーツにもつ本研究科ですが、その後、人文学部からの分野も加わり、現行の4専攻——「国際関係学専攻」、「言語文化専攻」、「心理学専攻」、「歴史学・地理学専攻」——が出揃って、ちょうど10年が経ちました。節目となる今年度の特筆すべき出来事として、内モンゴル大学蒙古学学院蒙古歴史学系（詳細は小誌後述）との学術交流協定の締結が挙げられます。

2016年7月のこと、本研究科の一部教員が教員研修旅行で内モンゴルを訪問した際、内モンゴル出身の本学大学院生の紹介で、内モンゴル大学蒙古学学院の副院長をはじめとする教員と交流を行いました。その折に、蒙古歴史学系の中に近年設立された「旅游管理（ツーリズム・マネージメント）専攻」だけが大学院課程を持たないため、本学の大学院への留学が可能か打診がありました。そこで本研究科の澁谷鎮明教授が、この件に関して協議を行うとともに、日本のツーリズム研究の現状について講演するために2016年10月に蒙古歴史学系を訪れ、その際に先方の副校長から交流協定締結の申し出がなされたという次第です。

この申し出から2年を経て、漸く学術交流協定締結の準備が整い、2019年1月12日、財部香枝副研究科長、澁谷鎮明教授、私の3人で内モンゴル大学を訪問し、蒙古歴史学系責任者である宝音徳力根教授と協定書への署名を交わしました。同地で進学説明会も開催したところ、学期末の帰省時期であるにもかかわらず、予想を超える人数の学生が参加し、日本留学への大変な熱意を感じることができました。

今後、先方では日本語教育をカリキュラムに組み込むなどして、より円滑に交流が行えるよう準備を整える予定とのことです。一方、こちらからは、当面海外研究指導委託支援制度等による大学院生の派遣や研究者の交流等を予定しています。また、先方からの学生の受け入れ準備として、秋学期入学や学術交流協定機関特別試験などの制度の導入も検討中です。

この他、国際関係学専攻では、海外研究指導委託支援制度を利用してマレーシア科学大学に学生を送っており、その縁もあり来日された同大学経営学部のMohd Anuar Arshad上級講師にご講演いただき、今回のご寄稿となりました。

国際関係学部と人文学部に跨って設置され、それ故「国際」と「人間」をキーワードにもつ国際人間学研究科としては、今後もさまざまな海外の教育研究機関と積極的に協定を結び、活発かつ持続的な人的交流を展開できればと考えています。

小誌を通して、こうした本研究科の動静もお伝えしていければと存じます。今後とも小誌をどうかよろしくお願ひ申し上げます。

2019年2月27日

柳谷 啓子（中部大学国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究所 言語文化専攻教授
柳 朋宏 (YANAGI Tomohiro)

名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。博士（文学）。専門は英語史的統語論。英語名詞句の分布と内部構造に関心がある。主な論文・著書に、“Intermittence of Short-distance Cliticization in QPs: A Case Study of Language Change from the North” (Kaitakusha)、*Outposts of Historical Corpus Linguistics* (VARIENG, joint work)、『文法変化と言語理論』（開拓社、共著）などがある。



言語接触と言語変化： 現代の英語に残る他言語の面影



はじめに

ヨーロッパ大陸の北西に位置するブリテン島から世界に広まり、世界共通語の地位を確立しつつある「英語」の歴史は、他言語との接触の歴史と捉えることができる。小論では、どのような経緯により他言語から語彙が借入され、英語の語彙が発達したのかを概観する。

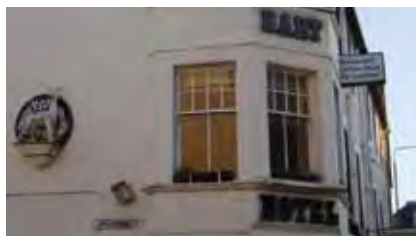
言語接触と英語の語彙

中島 (1979: 49) によれば、英語語彙の約 50% はラテン語・フランス語からの借用語であるのに対し、本来語は約 25%、ギリシャ系の語が約 10%、北欧系の語が約 5%、その他の言語からの借用語は約 10% だといわれている。一方、日常使用される語彙 1000 語に限れば、本来語は約 55% となり、フランス語・ラテン語からの借用語は 35% となる。

ラテン語は、ローマ帝国の公用語であり、中世ヨーロッパにおける政治・学問・教会の言語であった。英語には、アングロ・サクソン人がヨーロッパ大陸にいた頃から、語彙が借用されている。主な借用語には street, wall, wine, butter, cheese がある。またアングロ・サクソン人がブリテン島に渡ってからも、先住民であったケルト人を通して、あるいはキリスト教を通して、ラテン語から語彙が借用された。そのような借用語に chest, pail, cup, pot, monk, nun, altar, disciple, school, abbot などがある。

アングロ・サクソン人がブリテン島に侵攻

した際、ブリテン島にはケルト人が暮らしていた。彼らの言語であるケルト語からの借用語はあまりないといわれているが、その多くは地名や河川名に残っている。ロンドンを流れるテムズ川の Thames 「暗い川」やシェイクスピアの故郷を流れるエイヴォン川の Avon 「川」などがケルト語からの借用語である。このような固有名詞のほか、crag 「絶壁」、tor 「岩山」、bard 「吟遊詩人」などがある。The Bard of Avon 「エイヴォンの詩人」はシェイクスピアのことである。また、ラテン語の aqua vitae 「命の水」はケルト語で uisge beatha となり、英語の whisky/whiskey に発達する。whisky はスコットランドで、whiskey はアイルランドで用いられている。



White Hart Hotel
竹鶴政孝氏がキャンベルタウンでの実習期間中に、妻リタ氏と宿泊していたホテル。ホテル名に、後述する hart 「雄鹿」が用いられている。(筆者撮影)

2014 年、NHK で放映された連続テレビ小説『マッサン』のモデルとなったニッカウヰスキーの創業者である竹鶴政孝氏は、スコットランドのグラスゴー大学で学び、スコットランド西部の港町キャンベルタウンの蒸溜所で実習を行った。その経験を生かし、

帰国後、国産ウイスキーの製造販売を行った。そのため、日本のウイスキーは whisky と綴られる。一方、アメリカにはアイルランド人により蒸留技術が持ち込まれたため、アメリカのウイスキーは whiskey と綴られている。

さて、イングランドを侵略したアングロ・サクソン人だが、8 世紀から 10 世紀にかけて、デーン人（ヴァイキング）の侵攻に悩まされることになる。イングランドが征服されることはなかったが、ヴァイキングはイングランド北東部に居住することになる。デーン人との接触により、英語にはデーン人の言語である古ノルド語から語彙が借用された。

ケルト語からの借用語と同様、地名に古ノルド語の面影をみることができる。イングランド北東部の Derby, Whitby の -by は「農場」「町」という意味の古ノルド語である。この語は「村の法律」を意味する bylaw という語にも残っている。また、イングランド北部の町ヨークには、Micklegate や Fishergate のように -gate で終わる通りの名前がある。この -gate も古ノルド語からの借用語で「通り」を意味する。この語は、イングランドから遠くはなれたフィンランドにも持ち込まれた。そこでは、-katu として、Kirkkokatu や Kaivokatu のような通りの名前で用いられている。

そのほか、fellow, knife, take, husband, egg, skin などが古ノルド語からの借用語である。英語と古ノルド語はどちらもゲルマン語派に属しているため、類似の語も多い。本来語の shirt 「シャツ」に対する古ノルド語の skirt 「スカート」、shrub 「低木」に対す

る scrub「雑草」、ditch「水路」に対する dike「堤防」のように語源が同じ組み合わせの語がある。このような語の組み合わせは「二重語」(doublet) と呼ばれる。

デー人による侵略をまめがれたイングランドだが、1066年にはノルマン人によってイングランドが征服される。この出来事により、イングランドは「英語」の国から「フランス語」の国に(一時的にだが)移行した。その結果、英語には約 10,000 語のフランス語が入ってきたといわれている。政治や法律の語彙が多く、emperor, sovereign, jury, plaintiff, defendant, attorney, parliament, miracle, enemy, preacher などが借用された。

ノルマン人が話していたフランス語はノルマン・フランス語と呼ばれ、パリを中心に話されていた中央フランス語とは異なる方言であった。イングランドでは当初、ノルマン・フランス語が使われていたが、後に中央フランス語が使われるようになったため、英語の中にフランス語起源の二重語として残ったものがある。そのような二重語には、warden「管理人」と guardian「守護者」、warranty「保証」と guarantee「保証書」、cattle「畜牛」と chattel「動産」などがある。

印刷術の発達と英語の語彙

1476年、ウィリアム・キャクストンがロンドンのウェストミンスターに印刷所を開業する。印刷術の導入により、それまでの写本とは異なり、大量に同じものを製作することが可能になった。しかし、職業としての印刷所を考えた場合、印刷した本は売れなくてはならない。そのため、多くの人を読める綴字でなければならなかった。当時の英語には、同じ語に、さまざまな綴字が存在していたが、印刷本を出版するにあたり、いずれかに統一する必要に迫られた。そこで、キャクストンが選択したのはロンドン方言である。

当時のロンドン、ケンブリッジとオックスフォードを合わせた三角地帯の一角で、農作物の生産が豊かで、羊毛市場があり、経済活動が活発に行われていた地域であった。また、ロンドンには公的機関が設立されており、政治の中心地でもあったので、キャクストンの選択は間違いではなかっただろう。



活版印刷機
キャストンが使用したものと類似の印刷機を復元したもの。大英図書館の地下にひっそりと展示されていた。(筆者撮影)

しかし、実際にはそれほど単純ではなく、彼が翻訳・出版した『エネイドス』の序文で、「卵」の呼称をめぐる逸話が紹介されている。

And one of theym named sheffelde, a mercer, cam in-to an hows and axed for mete; and specyally he axyed after eggys; And the goode wyf answerde, that she coude speke no frenshe. And the marchaunt was angry, for he also coude speke no frenshe, but wolde haue hadde egges / and she vnderstode hym not / And thenne at laste a nother sayd that he wolde haue eyren / then the good wyf sayd that she vnderstod hym wel /

[p. 2, l. 29 - p. 3, l. 1]

シェフィールドという名の商人が、食べ物を探してやってくる。特に「卵」(eggys) が欲しいと尋ねるのだが、どういわけか、女主人には通じない。女主人はフランス語が話せない、という。これに対して、(なんととも気の短いことだが) 男は激怒する。なぜなら、自分もフランス語を話せないからだ。それから、ついに、別の男がやってきて、女主人に、「卵」(eyren) が欲しいというと、女主人に理解してもらえた。という話である。

本文にでてくる eggys/egges はイングランド北部で用いられていた語で、古ノルド語起源である。一方、女主人に理解してもらえた eyren はイングランド南部の言葉で、英語の本来語である。この2つの語のうち、キャクストンが選んだ語は一目瞭然で、借用語の eggys/egges であった。

語彙の借用と意味変化

他言語からの借用は、英語の本来語に意味変化をもたらすことがある。「動物」を意味する語は本来 deer であったが、フランス語から beast が借用されると、deer は特定の動物である「鹿」を意味する語へと変化した。この意味変化は、さらなる意味変化を引き起こした。それまで「鹿」を意味していた hart は、意味を特殊化させ「雄鹿」を意味するようになる。さらに、ラテン語から animal が借用されると、beast は「動物」から「獣」を意味する語へと変化した。このように一般的な意味から特定のな意味への変化を「意味の特殊化」と呼ぶ。

これに対して、一般的な意味を表すようになる意味変化を「意味の一般化」と呼ぶ。代表的な例は bird であり、元々の意味は「ひな鳥」であったが、今では「鳥」を意味する一般的な語である。それまで「鳥」を意味していた fowl は、アヒルやニワトリなどの「家禽」を意味するようになる。

おわりに

このように英語の語彙はさまざまな言語との接触を通して拡大していった。英語がアメリカ大陸に渡ってから、spook(オランダ語)、noodle(ドイツ語)、okra(西アフリカ)などの借用語がある。新しい語に出会った際、その歴史や他言語との接触について考えてみるのも興味深いのではないだろうか。

引用文献

中島文雄(1979)『英語発達史 [改訂版]』岩波書店。
Culley, W.T. & F.J. Furnivall, (eds.), 1890. *Caxton's Eneydos 1490: Englished from the French Liure des Eneydes, 1483*. EETS es 57. OUP. [reprinted in 1962]

* Profile左の画像は大英図書館のサイトで公開されている『リンディスファーン福音書』の1葉の一部である。この福音書は8世紀、イングランド北東部に位置するリンディファーン島のリンディスファーン修道院で制作されたものである。島嶼ハーフ・アンシャル体という書体で書かれている部分はラテン語であるが、その行間には注解が当時の英語で書かれている。

<https://www.bl.uk/collection-items/lindisfarne-gospels>



Profile

国際人間学研究所 歴史学・地理学専攻 特任教授

林 上 (HAYASHI Noboru)

1975年名古屋大学大学院文学研究科博士課程修了。『中心地理論研究』で文学博士（名古屋大学）取得。日本都市学会賞受賞、人文地理学会賞受賞。名古屋地理学会会長、港湾経済学会中部部会会長。専門は都市経済地理学。



名古屋圏の都市を読み解く —地理学的アプローチ—



「名古屋圏」という名前の由来と 歴史的背景

地表上のある空間を地名として呼ぶ場合、その空間の特徴をできるだけ正確に表す地名であるのが望ましい。「名古屋圏」とは、近世はじめに名古屋に城下町が開かれ、250年後に近代に移行してからも、引き続き名古屋が大都市として周辺に対して影響を及ぼし続けてきた範囲をいう。地理学ではこうした影響圏や都市的結びつきの広がり圏を圏域と呼ぶ。それゆえここでは、古い都を中心に東側の海であるから、2つの都の間であるから、あるいは日本の中央付近だからという曖昧な理由による東海、中京、中部という地名は用いない。あくまで大都市がその力でつくり上げてきた実質的圏域にふさわしい名前と呼ぶことにする。

さて、その名古屋圏が今日のような姿になるまでの歴史的過程を振り返ると、大きな前提として、伊勢湾の元にもなった巨大な湖の存在が大きい。湖であるから周辺には丘陵や山地が広がり、多くの河川が土地を削りながら湖に流れ込んでいた。湖の堆積土は常滑、瀬戸、美濃の窯業原料となり、地場産業都市が誕生した。巨大湖は南側が切れて湾すなわち伊勢湾になったが、その後の土地の隆起や沈降も重なり、複雑な地形が生まれた。地形は地殻運動だけでなく、海水準の変化の影響も受けた。伊勢湾が広がった温暖期は大垣付近に海岸線があり、気温低下とともに海岸線は後退した。海岸線の後退とともに現れた陸地は低湿地であり、集落の立地は微高地上に限られた。

古墳時代、集落は水害に遭いにくい標高5mより高いところに生まれ、有力者は台地の縁辺に古墳を築いた。熱田の断夫山古墳は直径が

150mもあり、尾張氏の勢力が海岸近くの台地上にあったことがわかる。その後、尾張の中心が尾張平野の北側に移ったことは、律令期に設けられた国府・国分寺・国分尼寺の跡が稲沢にあることからわかる。尾張でもっとも格の高い一宮は、文字通り尾張一宮の真清田神社である。ちなみに二宮は犬山の犬懸神社、三宮が熱田神宮であった。さらに平安、鎌倉、室町時代は続いて戦国の頃になると、清洲が政治中心になる。東海の巨鎮と称された清洲は、しかしながら低湿地に囲まれており、天下統一をなした徳川家康は那古野（名古屋）に新たな政治拠点を築くことにした。古渡（金山の北）、小牧も候補になったが、選ばれなかった。

近世の都市計画都市・名古屋の スタート

家康は、名古屋台地あるいは熱田台地と呼ばれる逆三角形の台地の北西端に防衛を重視して城を築き、その南側に町人を住ませた。清洲から移住した町人衆は、新たにスタートした城下町の最初の住人あり、以後、「清洲越し」という言葉は名古屋でもっとも古いことを意味するようになった。信心深い家康は美濃羽島の大須の地名と寺を借用し、南寺町・大須を城下に設けた。武家地の東側にも設けられた寺町は、合戦のさいに防御拠点の役割を果たした。これらに囲まれるように、一辺が1町（約109m）の長さをもつ碁盤目状の城下町が計画的に建設された。しかし弱点もあり、江戸や大坂に比べると城下町の中心は海岸から遠かった。このため家康は福島正則に堀川の掘削を命じ、熱田から生活物資を舟で運ばせた。熱田湊には魚市場や木材市場が立ち、納屋橋にも湊があった。木

材は木曾谷から筏流しで運んだ。

近世・名古屋の市街地は名古屋台地の上にはほぼ限られていた。西側や北側に広がる低湿地を避け、水はけの良い台地を選んだ家康には先見の明があった。名古屋に城を構えた尾張藩の領域は、西と北は木曾川、東は丘陵地、そして南は半島を含む海岸というように、地形によって画されていた。ただし木曾谷や岐阜の町など飛び地的な領域もあった。尾張藩の領域は広大な尾張平野を含む尾張国にほぼ等しく、いかにこの藩が有力であったかがわかる。小藩が入り乱れていた三河国と比べると、対照性は明確である。廃藩置県で尾張と三河は一緒になるが、愛知県庁が尾張藩の旧役所を引き継ぐことに異論を挟む余地はなかった。

鉄道でつながれた名古屋の都市構造

近代日本の国づくりの根底には鉄道建設があった。ただし、国家的スケールでの鉄道建設の起点は首都に定められた東京や、近世まで経済、政治の拠点であった大阪、京都であり、名古屋は中間的地位に甘んじた。新旧2つの都を結ぶ「両京鉄道」の建設ルートとして旧東海道沿いと旧中山道沿いが候補になったが、名古屋はそのいずれの上にもなかった。国は、列強による海側からの脅威を考慮して旧中山道沿いに建設することを決めた。鉄道は西から東へと延ばされ大垣までが完成した。さらに東へ延ばすために建設資材を品川から海路、伊勢湾まで運ばなければならなかった。名古屋港はいまだなく、武豊港から陸揚げすることになった。そのために武豊線が、イギリス人鉄道技師のウイリアム・ピッツの指揮のもとで建設された。名古屋駅は日本海側の敦賀まで延びる武豊線の途中

駅として開業した。

名古屋駅の開設場所は、吉田禄在・名古屋区長の主導のもと、広小路通を西に延ばした地点に決まった。江戸期の大火の教訓で火除地として拡張された広小路通の東端には、愛知県庁、名古屋区役所、名古屋商法会議所（商工会議所）があった。旧名古屋城は天皇が宿泊する離宮や鎮台になっており、官庁は栄付近に集まっていた。駅を降りたら正前方に官庁街がある、そのような場所として名古屋駅は設けられた。この駅舎は濃尾地震で被害を受けたが生き延び、1937年に現在地に新築移転した。これは貨客の増加に対応するため、併せて笹島貨物駅や稲沢の貨物操作場など、鉄道インフラも整備された。市街地を走る路面電車は京都電鉄の伏見線に続く全国で2番目に早い建設であった。名古屋駅が主要駅になったことにより、江戸時代に城下への出入口を意味した「名古屋五口」は昔語りとなった（図1）。



図1：近世の「名古屋五口」から近代の名古屋駅集中へ

中央本線のルート選を左右した地形条件

日本列島の中央付近を東西に連絡する鉄道として、東海道本線が全線、開通した。ルートは、名古屋以西は旧中山道と旧岐阜街道、名古屋以東は旧東海道に沿っている。しかしこれだけでは不十分であり、名古屋と大阪を結ぶ別ルートが関西鉄道株式会社によって建設された。この鉄道はのちに国有化され関西本線となるが、名古屋の東側では中央本線が国によって建設されることになった。名古屋は西の起点となり、東の起点として八王子が選ばれた。当初は東海道本線との接続を考えて御殿場とされたが、最終的には八王子に決まった。八王子から神奈川、山梨、長野の諸県を通るルートは、地形条件を考慮すると旧甲州街道沿い以外考えられない。問題は塩尻から中津川、中津川から多治見、さらに多治見から名古屋へ至るルートの選定である。木曾山脈の横断は当時の鉄道技術では不可能であり、中津川までは日本海に向けて流れる

奈良井川沿いを、そこから鳥居峠を越えて木曾川沿いを進むルートが選ばれた。

中津川以西は険しい木曾川峡谷を避けて庄内川沿いに多治見へ至る。多治見からは、旧尾張藩の御用窯として栄えた瀬戸を経由して名古屋へ向かうのが都市の力関係からすれば当然だったかもしれない。しかし瀬戸経由案は標高400m前後の愛岐丘陵を越えることができず採用されなかった。その結果、小牧経由で名古屋へ北から入るルートと、春日井（鳥居松）経由で東から入るルートの間で激しい論争が繰り返された。最終的に、名古屋の発展は東に向かうという東郊派が、北に向かうと主張した北郊派に勝ち、庄内川沿いルートに落ち着いた（図2）。しかし多治見～高蔵寺間の庄内川の深い峡谷部に鉄道を通すような平坦地はない。なぜこれほど深い谷があるかといえば、それは太古の昔から絶えることなく流れ続けてきた庄内川が、隆起を続ける山地を侵食してきた結果である。専門的には先行谷と呼ばれる谷の合間を縫うように14か所のトンネルが建設された。複線電化を機に現在は長大トンネルに代わった箇所もあり、使われなくなったトンネルは近代交通遺産として保存運動の対象になっている。



図2：名古屋～多治見間の中央本線建設ルート(1894年頃)

地形を読んで建設された鉄道・駅と都市構造

名古屋駅始発の中央本線の列車は、金山駅では半地下構造のホームにすべりこむ。ここが半地下構造になっているのは、武豊線の建設時に熱田台地上の道路と立体交差させるためである（図3）。崖を崩して掘り出された土砂は、低湿地の名古屋駅へと至る鉄道敷地を嵩上げするために利用された。つぎの鶴舞駅は高架式で、さらにつぎの千種駅に着くとホームの東側は壁になっており、西側は普通の変則的な半地下ホームであることに気づく。鶴舞駅あたりもかつては低湿地帯で、鶴舞公園は新堀川の改修時に出た土砂を埋め立てて高くなった土地である。千種駅の西側は名古屋台地の一部が南北方向に侵食されたために東側より低い準低地であ

る。中央本線の開通時に駅があったのは千種駅のみで、西の名古屋駅に対し、千種駅は東の玄関として位置づけられた。中央本線に限らず、傾斜が苦手な鉄道は台地や段丘など平坦な地形を探しながら建設された。建設時の苦労を思い起こさせる痕跡は、複雑化した都市構造の中に埋没して見えにくくなってしまった。しかし基本的に、リニアな鉄道インフラの特徴は時間が経過しても大きくは変わっていない。現代都市は近代に建設された都市構造の延長線上にある。



図3：地形に応じて建設された中央本線と駅

都市形成に関わった空間的論理に気づく

都市を読み解く意義は、都市を歴史的、地理的に理解する点にある。それは教育・研究以外に、まち歩きを楽しむや観光を目的とする場合についてもいえる。どのような都市においても、なぜここを旧道が走っており、またなぜ溜池が沢山あるのかなどといった疑問を抱かせる素材がころがっている。丘陵地を造成して生まれた大学や住宅団地にも、その場所が選ばれるに至る時代的状況があったはずである（図4）。都市を読み解くカギは、都市形成に関わったであろう空間的論理の、歴史的、地理的な働き方に気づくことである。

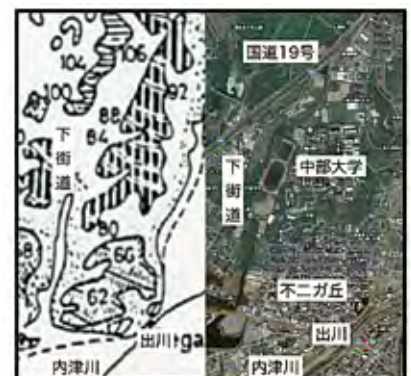


図4：中部大学付近の地形区分と空撮写真



Profile

マレーシア科学大学 経営学部 上級講師

Dr. Mohd Anuar Arshad, PhD

Graduated from Murdoch University, Perth, Western Australia (PhD)

Raised and born in Kuala Kurau, Perak, Malaysia

Area of expertise: Human Resource Development, Human Resource Management and Spiritual Intelligence



Spiritual Intelligence for Organizational Sustainability and Success in the Age of 5th Social Revolution



Introduction

In the age of 5th Social Revolution (5th SR), organizations are very much concerned on behavioural issues of the workforce related to integrity and ethical problem of their employees which is beyond what the Intelligence (IQ) and Emotional quotient (EQ) can do. Thus, people's quality and values are the top priority of current and future determinants in hiring and developing employees for organizational success and sustainability. Therefore, the 3rd intelligence or quotient which is Spiritual Intelligence (quotient) (SI/SQ) had been considered very important in human development process as early as in the family institution, society and country systems as a whole. Deterioration of the SI or values of the people resulted in huge destruction of the country development and great failure of the organisations leading to bankruptcy and close down of companies.

Battling the issues of deviant behaviour of the workforce, present organizations allocated greater effort in enhancing their employee's values and quality to perform their tasks in effective and efficient manner via types of behavioural development programs such as ethical workplace training, integrity awareness program, organizational citizenship behaviour, Islamic work ethic, ethical leadership training, etcetera.

Spiritual Intelligence (SI/SQ)

Employee behaviour is the most critical aspect in HRD program design, delivery and implementation. SQ is one of the ultimate intelligences that can develop employees' sincerity in organisations (Zohar, 2012) and exhibit huge impact on a person's life (Mirzaaghazadeh, Farzan, Amirnejad, & Hosseinzadeh, 2016). The SQ practices can help organisations to develop employees' values and citizenship behaviour (King & DeCicco, 2009; Ronel & Gan, 2008), increase the flexibility of employees (George, 2006), decrease the ego of the employees (Inglehart, 1990) could unite the employees and lead to more meaningful work (George, 2006; Klaus, Fernando, Humphreys, & Humphreys, 2016), and help to identify what people and the organisation are about (Zohar & Marshal, 2004).

Conclusion

Organizations must holistically develop their employees by giving fair and just development of collective intelligence which is IQ, EQ, and SQ to make sure employees are able to perform effectively and efficiently for the organizational sustainability and success. Furthermore, with a crucial challenge of 5th SR which witnessed the deterioration of SI of people all over the world has made an urgent wake up call to organizations to re-develop better employee's development program.

Certainly, SQ strengthens human integrative perception of wholeness and thinking beyond materialism, which push people towards spiritual path and also help them to cope with painful circumstances in the organizations especially during the 5th Social Revolution age.

References

George, M. (2006). Practical application of spiritual intelligence in the workplace. *Human resource management international digest*, 14(5), 3-5.

Inglehart, R. (1990). *Values, Ideology and Cognitive Mobilization in New Social Movements*.

King, D. B., & DeCicco, T. L. (2009). *A viable model and self-report measure of spiritual intelligence*.

Klaus, L., Fernando, M., Humphreys, P., & Humphreys, P. (2016). Enacting spiritual leadership in business through ego-transcendence. *Leadership & Organization Development Journal*, 37(1).

Mirzaaghazadeh, M., Farzan, F., Amirnejad, S., & Hosseinzadeh, M. (2016). Assessing the correlation of Machiavellian beliefs, spiritual intelligence and life satisfaction of Iran's national team athletes (The Iranian national athletes as a Case Study). *Pacific Science Review B: Humanities and Social Sciences*, 2(3), 88-93.

Ronel, N., & Gan, R. (2008). The experience of spiritual intelligence. *Journal of Transpersonal Psychology*, 40(1), 100-119.

Zohar, D., & Marshal, I. (2004). *Spiritual Capital: Wealth We Can Live By* (Using Our Rational, Emotional and Spiritual Intelligence to Transform Ourselves and Corporate Culture). London: Bloomsbury.

Zohar, D. (2012). *Spiritual intelligence: The ultimate intelligence*: Bloomsbury Publishing.



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 博士前期課程 M1

川井りさ子 (KAWAI Risako)

1995年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻博士前期課程在学中。専門は博物館学。現在、成人の科学教育における博物館のハンズオン展示に注目して航空系博物館を中心に研究している。



成人の科学教育の場としての博物館に関する研究 —ハンズオン展示を中心に—



はじめに

本研究は、博物館教育の中でも、特に成人の科学教育（科学教養）を中心に探究するものである。具体的には、博物館のハンズオン展示は、一般的に年齢が低い子どもが対象とされている中で、「探究心を刺激し、理解力を深め、実用的知識を蓄積する」といった付加価値・効果を成人教育に転用できないかどうかを検討する。

研究方法

博物館学やサイエンスコミュニケーション論等、先行研究のレビューを行うほか、博物館では体験学習に際してどのような取り組み・教育方法をしているのかフィールドワークを行う。

研究経過

2018年の夏季休業中には、中部大学蝶類研究資料館企画展のサイエンス・カフェに参加した。以下では近隣の航空系を中心に、研究経過を示す。

①あいち航空ミュージアム(2018/8/29、10/24 視察)
愛知県西春日井郡の同館は航空機産業の歴史や航空機の仕組みなどを、ミュージアムを通して体感してもらうことを中心とした

施設である。8月29日の同館では家族連れで訪れている人が多く、自身の研究テーマにもあるような「成人」で年配の方はほとんどみられなかった。10月24日は小学生の社会見学の団体40人くらいと年配の女性の団体があり、個人で来ていたのは筆者と外国人のもう一組しかいなかった。小学生の団体は航空機などの機体を絵で描くといった課題をやっていた。

②かかみがはら航空宇宙博物館
(2018/10/3 視察)

岐阜県各務原市の同館は航空宇宙に関する知識、技術等の普及及び啓発を行うとともに、将来の航空宇宙産業を担う人材を育成し、航空宇宙分野の科学技術の振興に寄与することを目的とし設立されたものである。10月3日の同館では小学生の社会見学の団体も来ていたが、平日ということもあり60歳以上の年配の方が比較的多かった。



③ FLIGHT PARK(定期的に参与観察中)
愛知県常滑市の同館は複合商業施設 FLIGHT OF DREAMS 内にあるボーイング787初号機(ZA001)を中心に、9つの体験型コンテンツで構成されているア

ミュージアム施設である。

ナイトミュージアム

10月26日(金)、27日(土)の2日間、あいち航空ミュージアムで開催された夜のミュージアムを開放するイベントは、展覧デッキも開放し、「夜の空港解説(空港の灯火について)」や「日本航空機製造が製造した双発ターボプロップエンジン方式のYS-11と呼ばれる、第二次世界大戦後にはじめて日本のメーカーが開発した旅客機の機内公開」、「フライングボックスと呼ばれる中部地方の空を疑似飛行するという映像型プログラムの特別上映」を行っていた。このようなイベントは成人向け教育の需要の高まりの反映といえるだろう。

おわりに

これらの3館にはそれぞれ特徴がみられる。それらを比較・検討し、科学教育に際しての相違等を検討していきたい。なお、2018年10月から2019年3月まで、名古屋市科学館において天文指導者養成講座を受講している。また、春季休業中に海外研究指導委託制度を利用し、マレーシア科学大学博物館にて、展示や講演等の参与観察を行う。これらによって得た知見も、修士論文に活かしたい。



Profile

国際人間研究科 国際関係専攻 博士前期課程1年
セレンメン

中国・内モンゴルに生まれ、2015年内モンゴル大学のモンゴル歴史学部を卒業した。現在、内モンゴルのフルンボイル市・新バルグ右旗のゲルキャンプ運営を中心に、草原観光の季節的変動の実態と観光客が少ない時期の現状と問題点について研究している。



内モンゴル・フルンボイル市における草原観光の季節的変動に関する研究—新バルグ右旗のゲルキャンプ運営を中心に—



はじめに

現在中国の内モンゴル自治区では、草原の自然環境化、モンゴル族の文化を楽しむ、草原観光が行われている。

「ゲルキャンプ」は、草原観光で最重要の施設でもある。これまで、内モンゴル観光について、海外での学術的研究やゲルキャンプを観光の季節的変動という視点から考えた研究は不足している。また、中国国内の観光研究でもこのゲルキャンプのみに注目したものは少なく、モンゴル族の研究者によるものは少ない。

本研究では、草原観光の拠点であるゲルキャンプの運営の特性を明らかにすることを目的とする。その際に、季節的変動に注目する。本研究を通じて現地の経済発展を進める方法を探りたい。その際に、今研究のような民族観光について、伝統文化を観光資源として整備している日本の成果も参考としたい。

研究方法としては研究テーマに関連する先行研究や各種資料を分析し、フルンボイル地域のゲルキャンプ現地調査を行っている。調査では、主として観光業者と観光客に聞き取り調査を行っている。

内モンゴル自治区の概況

内モンゴル自治区は、中国の北部に位置し、全域の面積は、118.3km²である。人口約2,528.6万人(2017)を有し、おもにモンゴル民族と漢民族が混在する多民族地域である。地域内には、省都の呼和浩特(フフホト)のほか、フルンボイル、包頭(バオトウ)、烏海(ウーハイ)、赤峰(チーフン)、通遼(トゥンリャオ)など12の市と盟が存在する。



図1 ゲルキャンプ(筆者撮影)

草原観光とゲルキャンプ

自然と文化的観光資源が豊富な内モンゴル自治区では1978年からモンゴル族の伝統的な祭りであるナーダム、乗馬や散策、モンゴル音楽の鑑賞、馬頭琴の演奏などを見ながら、大草原を楽しむ草原観光が始まった。そして、ゲルキャンプとは、草原地域の遊牧民の組立移動式テントを用いた、モンゴル民族特有の観光施設であり、草原観光で最重要の宿泊施設でもある。



図2 草原観光(筆者撮影)

ゲルキャンプの運営と現状

草原地域では遊牧民の組立移動式テント「ゲル」を用いたモンゴル特有の観光施設「ゲルキャンプ」が急速に増加している。そのため、筆者はフルンボイル市・新バルグ右旗

におけるゲルキャンプの基本現状を明らかにするため、独自の現地調査と聞き取り調査を行ってきた。世界四大草原の一つであるフルンボイル市は内モンゴル自治区の東部に位置し、総面積25.3km²であり、内モンゴル自治区全面積の21.4%を占める。南部は内モンゴル自治区の興安盟(ヒャンガン・アイマグ)、北と西はロシア国、モンゴル国と接し、三つの国の境界に位置している。

その結果、観光交通手段はほとんど旅行者達が自分で車を運転して来訪する。主な来訪客は中国の北京、深圳、上海等からの大都市の旅行者である。忙しい日常生活から離れ、伝統的に草原に暮らしている遊牧民の生活文化を乗馬、乳製品の手作り、羊毛を刈る等の活動を通し、自然を楽しむことを目的としている。

そして、ゲルキャンプは早いもので2010年から始まり、この地域では今までまだ8年経っていない。1年の営業期間は5月から9月末までの約4ヶ月と短く、夏季を中心に営業し、冬季は閉鎖される。

おわりに

調査結果としては新バルグ右旗のゲルキャンプは季節営業であり、冬はほとんど休業している。今後、日本の観光業の季節的対応方法を参考にし、内モンゴル自治区新バルグ右旗のゲルキャンプの季節営業の特性を研究していきたい。モンゴル人自身の力で民族の文化を具体的に紹介し、フルンボイル・新バルグ右旗及び周辺観光地の発展につなげられればと思う。

引用文献

内モンゴル統計局
<http://nmgtj.gov.cn>



シンポジウム「関中平原開発史考」を開催

2019年1月24日（木）に、人文学部歴史地理学科・国際人間学研究所・国際人間学研究所主催によるシンポジウム、「関中平原開発史考：考古学と歴史学からみる『人と水資源』」が開催された。外部からの報告者として、中国考古学をご専門とする南山大学の西江清高教授、東アジアの環境史をご専門とする淑徳大学の村松弘一教授をお招きした。

まず、本研究科の渡部展也准教授により中国大陸の地理及び初期王朝期までの様相について報告があった後、上記2名の報告者から西周および秦が如何にして関中平原に展開し経営を行ったかについて、それぞれの興味深い研究成果が報告された。後半では、コメンテーターを務めた本研究科の一谷和郎准教授からの質問・コメントを中心に、考古学、歴史学、地理学にまたがる多角的な視点から「関中開発」が活発に議論された。



主催：中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所・国際人間学研究所

関中平原開発史考

考古学と歴史学からみる「人と水資源」

中国大陸、華北に位置する関中平原は、古代以来多くの王朝が拠点としてきた中国史の表舞台のひとつである。前三千年紀の後半、新石器時代の晩期に各地で隆盛した諸文化が力を失うなかで、これらの諸要素を取り込むように二里头文化（「夏」）が隆盛する。これに続く殷も関中平原の東隣、いわゆるその後の中原地域に拠点を置いたが、その後の西周王朝や秦漢帝国は関中平原を拠点としながら経営を行っていく。

周辺地域への結節点としての地政学的な利点もさることながら、広大な黄土の盆地地形という特徴的な地理環境もまた、これらの地域に舞台装置としての面白さを加味している。環境決定論的な見方は否定されて久しいが、それでもなお巨視的にも微視的にも環境の影響力は決して小さなものではないはずである。むしろ大きな影響力への対応こそが集団としての人間活動の必然を高めた側面を認める事さえできるかもしれない。演目のために舞台が作られるのか、舞台によって演目が彩られるのか、本シンポジウムでは特に文明にとっての根幹となる水資源に注目し、新石器時代、西周王朝から秦漢帝国に至るまでの関中平原の開発史について考えてみたい。

開催日時：2019年1月24日（木） 13:00～17:00
 開催場所：中部大学不言実行館2Fスチューデント・コモンズ
 対象者：学部生・大学院生・聴講生・教職員など/入場自由

12:40 開場

13:00～13:05 開会の辞

13:05～13:10 趣旨説明

13:15～13:45 渡部展也（中部大学）新石器時代の生業と関中平原の自然地理

13:50～14:50 西江清高（南山大学）西周王朝の形成とその文化地理的基礎

14:50～15:05 休憩

15:05～16:05 村松弘一（淑徳大学）秦都の変遷と関中平原の開発～西垂から咸陽へ

16:10～16:45 コメント・発表者討議 コメンテーター：一谷和郎（中部大学）

16:45～16:55 質疑応答

16:55～17:00 閉会の辞

【お問い合わせ先】歴史地理学科渡部研究室 nov@isc.chubu.ac.jp



内モンゴル大学

内モンゴル大学 (Inner Mongolia University = IMU) は、中華人民共和国の設立後、1957年に少数民族地域に創設された初の総合大学であり、北京から約400キロ離れた内モンゴル自治区の首都フフホトに位置する。早くも1978年には、権威ある大学として優先的に予算が配分される「国家重点大学」に認定され、また1997年にも中国における大学重点化政策「211工程(プロジェクト)」において内モンゴル自治区で唯一の重点大学に選ばれた。さらに2012年には、中西部高等教育機関の総合力向上プロジェクト大学にも指定されている。

IMUは、経済学、法律、文学、歴史、科学、工学、農業、経営、芸術などを網羅する21学部、3分校(交通学院、オルドス分校、滿州里分校)からなり、学部生約19,000名、大学院生約6,500名、留学生800名が在学し、その内、モンゴル族をはじめとする少数民族学生が約35%を占める。世界の蒙古学研究の拠点であるとともに、同校の中国少数民族言語・文学、動物学の分野が国家重点領域に、また生態学の分野が国家重点育成領域に認定されており、研究レベルは非常に高い。



内モンゴル大学正門前にて(左から湍谷、柳谷、財部)

蒙古学学院

蒙古学学院は、蒙古言語文学科を前身として蒙古研究と関連分野の研究者育成のために設立された。蒙古言語文学科は、1957年の大学創立と同時に設立され、1962年には大学院生の受け入れを開始し、1984年には蒙古言語・文学分野での博士学位授与権限を付与されている。その後1995年に、蒙古言語文学科、蒙古研究所、蒙古歴史研究

所などを統合して蒙古学学院が設立されるに至った。現在、教育機関としては、蒙古言語文学系・新聞出版学系・公共教育学部があり、研究機関としては、蒙古語文研究所、蒙古文学研究所、蒙古文化研究所を有する他、さまざまな蒙古関連分野の研究拠点となっている。



蒙古学学院棟

蒙古歴史学系

今回、国際人間学研究科が学術交流協定を結んだ蒙古学学院の蒙古歴史学系は、2011年に蒙古歴史研究所と内モンゴル近現代史研究所を基礎として、蒙古学学院からは比較的独立した教育研究機関として設立された。同学系は、学問分野としての蒙古史の構築・発展を担う研究者と旅游管理(ツーリズム・マネージメント)研究における優れた人材の育成を教育目的とし、教育機関としては、蒙古語で授業を行う歴史学専攻と旅游管理専攻がある。また、研究機関としては、蒙古史研究所、内モンゴル近現代史研究所、蒙古公文書アーカイブセンター、蒙古高原歴史地理学・考古学研究センターなどを有している。



協定書への署名を終えて

(前列左より宝音徳力根蒙古歴史学系責任者、財部、柳谷、苏徳毕力格蒙古学学院副院長、湍谷)

2017年6月現在の所属スタッフは、教授5名、准教授9名、講師13名であり、

博士号取得率100%、日本の大学への留学経験者が多く、7割が日本語に堪能である。これまでに、学士504名、修士253名(内、留学生13名)、博士91名(内、留学生21名)が巣立ち、多くが国内外の大学・研究機関などで活躍している。2017年現在、博士課程14名、修士課程67名、学部生332名、留学生9名を含む422名の学生が在籍している。

歴史学と旅游管理の組み合わせには幾分違和感があるかもしれないが、建国当初の中国の旅行ガイドが、国を代弁する政治的・外交的役割を担っていたことを考えれば理解できる。

国際人間学研究科に学生が進学して来る可能性が最も高い旅游管理専攻では、現在約160名の学部生が学んでいる。主な授業は蒙古語と中国語で行われており、観光経営の基本理論と実践的スキル、蒙古の歴史・文化の確かな知識を身につけた卒業生は、観光業界の様々な部門の実務職、および、教育・研究職に就いており、多言語に堪能な旅游管理の専門家として蒙古民族の地域観光の分野におけるニーズを満たしているという。



学内にある桃李湖の氷は厚さ50cm

参考文献

『内蒙古大学』『百度百賞』

最終更新日2018.11.3 <https://baike.baidu.com/item/%E5%86%85%E8%92%99%E5%8F%A4%E5%A4%A7%E5%AD%A6>

『蒙古学学院简介』『内蒙古大学公式Webページ』

最終更新日2016.4.27 <http://mgx.imu.edu.cn/xygk/xyjj.htm>

『蒙古历史学系』『内蒙古大学公式Webページ』

最終更新日2017.9.13 <http://mgx.imu.edu.cn/jgsz/mglstxx.htm>

小林正典(2018)『中国のガイド及び添乗員の規制と旅遊法の改正』『和光大学現代人間学部紀要』第11号, pp.23-42



2018年度FD講演会「思想を語るメディア」を開催

2019年1月23日（水）に、人文学部・国際関係学部・国際人間学研究科主催による2018年度秋学期FD講演会が開催された。講師として、現在進行中の文系学部再編整備充実検討委員会専門委員会の委員長でいらっしゃる辻本雅史副学長をお迎えし、最近のご研究についてご報告いただいた。今後も関係者一同がさらに力を合わせてより円滑に教育改革を推し進める一助とするため、FD活動との位置付けで開催したものである。「思想を語るメディア：江戸思想史再構成のこころみ」と題するご講演では、思想を「知」ととらえ、また、学校等の教育システムを知を伝えるメディアの一つとみなし、その知の形成・表現・伝達などを現在進行中の「メディア革命」の状況を意識した視点から捉え直す試みが展開された。ご講演後、時間を延長して質疑応答が行われ、興味深い活発な議論が行われた。



中部大学 国際関係学部・人文学部・国際人間学研究科 主催

2018年度FD講演会

日時： 2019年1月23日（水）
研究科委員会終了後（17:30頃～）

場所： 人文学部会議室（25号館2階）

辻本 雅史 教授
中部大学副学長・現代教育学部長

演題： **思想を語るメディア：
江戸思想史再構成のこころみ**

概要： 思想を「知」ととらえて、その知の形成、知の表現、知の伝達、などを、メディアの視点からとらえなおしてみると、従来描かれてきた思想史の構図とは大きく異なる様相が現れて来る。その新たな構図で思想をとらえることで、何が新しく見えてくるのか。現在進行中の「メディア革命」のありようを、意識して議論する。

■どなたでもご参加いただけます。特に院生の来場を歓迎します。



第9回「院生の力」研究報告会を開催

中部大学国際人間学研究所 主催

第9回「院生の力」研究報告会

日時 11月7日(水) 15:30~17:00
場所 20号館12階会議室

第1報告

ラヤマジ・ディベンドラ 国際人間学研究所 国際関係学専攻 博士前期課程2年
The Industrial Development and Climate Change over decade;
developing country Nepal

コメンテーター： 田中高 教授 (国際人間学研究所国際関係学専攻)

第2報告

川井りさ子 国際人間学研究所 国際関係学専攻 博士前期課程1年
成人の科学教育の場としての博物館に関する研究：
ハンズオン展示を中心に

コメンテーター： 財部香枝 教授 (国際人間学研究所国際関係学専攻)

第3報告

セレンメン 国際人間学研究所 国際関係学専攻 博士前期課程1年
内モンゴルフルンボイルにおける草原観光の季節的変動に関する研究：
新バルグ右旗のゲルキャンプ運営を中心に

コメンテーター： 渋谷鎮明 教授 (国際人間学研究所国際関係学専攻)

学部生の来聴を歓迎します!!

第9回「院生の力」研究報告会が2018年11月7日に開催された。今回は、学位論文提出を控えた国際関係学専攻の博士前期課程2年生1名と、本格的に研究に着手した国際関係学専攻の博士前期課程1年生2名が発表した。指導教授のアドバイスや参加者からの質問・意見を交えながら興味深い議論が交わされた。



第10回 教員研究報告会を開催

第10回教員研究報告会が2018年11月28日に開催された。今回は、先ず言語文化専攻の柳朋宏教授が「言語接触と言語変化：現代の英語に残る他言語の面影」というテーマで発表した。柳教授は、今や世界の共通語となりつつある英語の語彙拡大の歴史が、さまざまな言語との接触の歴史と捉えることができることを、時代背景の変化と借用語の実例を挙げながら概説した。続く歴史学・地理学専攻の林上特任教授は、「名古屋圏の都市を読み解く」というテーマで発表した。林特任教授は、名古屋圏が今日のような姿になるまでの歴史的過程について、政治の中心地や鉄道の経路、駅などの場所が選ばれるに至った時代状況振り返りながら解説し、都市を読み解く意義が、都市を歴史的・地理的に理解する点にあることを示した。



中部大学国際人間学研究所 主催

第10回 教員研究報告会

日時 11月28日(水)
研究科委員会終了後 (17:30頃~)
場所 人文学部会議室 (25号館2階)

柳 朋宏 教授

国際人間学研究所 言語文化専攻

「言語接触と言語変化：
現代の英語に残る他言語の面影」

林 上 特任教授

国際人間学研究所 歴史学・地理学専攻

「名古屋圏の都市を読み解く」

院生・学部生の来聴を歓迎します!!

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋をかけて、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/文化相関の科学哲学/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリティシズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系/文化相関の科学哲学

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系/文化相関の科学哲学

特別研究

研究指導


研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：柳谷 啓子
 - 発行日：2019年3月18日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/